発行者　千葉大学大学院人文社会科学研究科

Vol. 19

人社研 Newsletter

2007（H19）年度後半期社会文化科学研究科学位記伝達式

目次

巻頭辞　2
2007年度後半期学位授与式　3
専任教員業績　5
新規科目担当者　5
大学院教育支援室新規担当者　6
博士後期課程共同研究室新規担当者　6
科学研究費（新規）プロジェクト　6
所属教員による出版物　7
修了生による出版物　9
博士後期課程大学院生の研究業績　10
2008年度前半期全体研究会のお知らせ　12
2008年度紀要刊行予定　12
博士後期課程共同研究室の夏季開室時間変更　12

外国人研究者の招聘に関連して

人文社会科学研究科長　　三宅明正

日本の大学では、近年、いわゆる「競争的外部資金」の占める比重が急速に大きくなってきている。私たちの研究科も、とくに学外から資金を獲得すべく努力している。もっともこうした傾向が、これからの研究・教育に、長期的に見てどういう影響をもたらすことになるのかは、慎重に検討される必要がある。研究も教育も、元来競争には馴染まない性格をもっているからである。

ところで、「競争的外部資金」の比重が高まったことの結果の一つに、外国人研究者の頻繁な来日がある。それこそ年度末ともなるとあちこちで「国際シンポジウム」が開催され、大学によっては所在地と東京とで毎週のようにそうした催しを実施したところもあった。分野にもよろうが人文・社会系では、研究・教育費の多くは調査のための旅費などの経費や、図書・資料の購入費用にまわることがおおく、大型の外部資金をことに単年度で用いるとなると、海外から人を招聘してシンポジウムを開催するというのが一般的である。私たちの研究科の場合、そうしたシンポジウムも行ってはいるが、院生向けに集中講義をお願いしたり、個々の研究会に講師として招きじっくりと討議を行うといったことが少なくなく、「堅実な」研究・教育活動という特徴がここにも現れているように思われる。

そのような外国人研究者の招聘にかかわって、さいきん、ヒヤッとする事態があった。2007年11月から入管制度が変わり、来日する外国人に指紋押捺と写真撮影が義務づけられたことは有名である。2008年の洞爺湖サミットに際し、法務省入国管理局は入国審査体制を極端に強化した。このなかで、長時間にわたって入国審査を受けたり、滞在日程を短縮させられるケースが出ているという。とくに影響を受けているのは、ジャーナリスト、研究者、社会的な発言を行う人々である。

ネグリとの共著『帝国』で名高いマイケル・ハート（Michael Hardt、デューク大学）やマウリツィオ・ラッツァラート（Maurizio Lazzarato、『マルチチュード』編集委員）といった人々は、 成田と関空とで長時間にわたり拘束された。スーザン・ジョージ（Susan George）も4時間程拘束されたとのことである。千葉大学でも科研費でお招きしたある学者が拘束されるのではないかという情報があり、人文社会科学研究科としても「不測の事態」がありうるかもしれないという対応をとらざるを得なかった。

民主国家は多様な意見を認めると言うことが大原則である。最近、外国人ジャーナリストなどの立ち入りを制限し、国際的に批判を浴びたのは、ビルマ（ミャンマー）や、チベット問題での中国であった。これらの国の政府の対応には、私も憤りを禁じ得ない。そして、日本政府の外国人入国への対応についても、もっと注意を払っていきたいと思う。

2007（H19）年度後半期学位授与式および学位記伝達式

2008年3月26日、千葉県文化会館において学位授与式が行われ、人文社会科学研究科として、初めての修了生（博士前期課程）を送り出しました。

同日、社会文化科学研究科長室において社会文化科学研究科学位記伝達式（右写真）が行われ、三宅明正研究科長から1人1人に修了証書が手渡されました。以下に掲載する9名の方が社会文化科学研究科を修了して学位（博士）を取得され、2名の方が論文提出により学位（博士）を取得されました。

また、マルチメディア会議室において人文社会科学研究科学位記伝達式が行われ、65名の方が人文社会科学研究科博士前期課程を修了し、学位（修士）を取得されました。

2007年度後半期社会文化科学研究科博士後期課程修了者

氏名	論　題	取得学位
大山麻稀子	V.M.ガルシンとその時代	博士（文学）
崎山直樹	1840年代ダブリンにおけるナショナリズムとリピール運動	博士（文学）
廣木華代	債権者間の競合に関する一考察―租税債権と譲歩担保との競合を素材にして―	博士（法学）
姉川雄大	19－20世紀ハンガリーにおける体育と軍事―国民化政策の失敗と統治の転換―	博士（文学）
尾形まり花	私的言語はどのように不可能であるのか	博士（文学）
崔鳳傑	地方公共団体による会計改革	博士（経済学）
井上猛継	無裁定価格理論の金融数理	博士（経済学）
権承文	中国建物区分所有権制度の法的考察―管理制度を中心とした日中比較―	博士（法学）
江涛	中国における譲渡担保制度の立法課題に関する研究	博士（法学）

論文提出による学位取得者（2008年3月）

氏名	論　題	取得学位
壁谷彰慶	行為者性と自由―「失敗」と「不自由」の観点から―	博士（文学）
下村英視	言葉を持つことの意味―近代合理性の批判と展望―	博士（学術）

人文社会科学研究科博士前期課程学位（修士）取得者（2008年3月）

今枝　春菜	伊藤　祐輝	藤原　李奈	奥村　亮
近江　哲	伊藤　幹	古澤　美映	工藤　園子
及川　季江	佐藤　大毅	森　有子	工藤　智美
金　敬善	高　紫東	小野　琢也	蔵本　裕子
姜　紅星	斉　海山	金井　美由紀	鈴木　彩代
朽名　彩	佐藤　修平	権　金亮	関口　勝夫
工藤　宗之	高野　彬	坂本　郁生	朴　銀姫
佐藤　正三郎	陳　玲	花田　成孝	平井　慎
申　宗泰	PHAM THI THANH MAI	洪　冬芹	朴　文玉
須賀　隆章	馬上　丈司	JOSHUA WAYNE FERRIS	金井　茂樹
戸波　智子	山中　亜紀子	李　ヨウ	村上　夫光子
福田　美波	柳　麗	小野　勝司	山中　勲
前澤　温子	石田　泰子	近藤　嘉秀	山本　順一
三村　達也	金澤　佳子	山本　卓	横山　貞夫
楊　昉	佐藤　敦	阿部　悟	
李　雅楠	張　馳	石井　紀之	
李　葉箋	那木拉	大村　智一	

2007（H19）年度人文社会科学研究科専任教員業績（2008年1～3月）

著書・論文

小林正弥「比較文明論と歴史公共哲学――地球的文明へのビジョン」『公共研究』第４巻第４号（2008年3月）pp.17ー42　＊pp,43ー55パネルディスカッションにおいての発言もあり

Masaya KOBAYASHI, “Neo-Dialectical Democracy as the Perpetual Revolution: From Quolified Democracies to 'High-Quality Democracy'“, *Aspects of Democracy*, Towards Solutions for 21st Century Developments, November 28,2007, March, 2008.

広井良典編『「環境と福祉」の統合――持続可能な福祉社会の実現に向けて』有斐閣、2008年2月。

佐藤博信「古河公方家臣本間氏に関する考察―特に本間政能を中心として―」『茨城県史研究』92号、2008年2月。

佐藤博信「室町・戦国期の下野那須氏に関する一考察―特に代替わりを中心に―」『戦国史研究』55号、2008年2月。

佐藤博信「古河公方家臣簗田氏に関する考察―特に簗田伍郎を中心として―」『千葉県史研究』16号、2008年3月。

高光佳絵『アメリカと戦間期の東アジア――アジア・太平洋秩序形成と「グローバリゼーション」』青弓社、2008年3月。

研究ノート

野沢敏治「循環を作るということーー経済学における自然認識を再評価するための序ーー」野沢敏治編『日本と中国における国土開発と市民社会形成』（人文社会科学研究科　研究プロジェクト報告書第１４６集）、2008年3月。

その他

佐藤博信「【小論】常陸鳥名木城跡と石井進氏撰文の石碑」『日本歴史』718号、2008年3月。

佐藤博信「【資料紹介】安房妙本寺所蔵『富山一流草案』」『千葉大学人文社会科学研究』16号、2008年3月。

佐藤博信「【資料紹介】房総里見氏文書集」『千葉大学人文研究』37号、2008年3月。

2008（H20）年度前半期新規科目担当者

2008年度の人文社会科学研究科新規科目担当者は以下の通りです。

課程	専攻	研究教育分野	職名	氏名	科目名
博士前期課程	公共研究	共生社会基盤研究	教授	鈴木伸枝	移動の人類学、移動の人類学演習
博士後期課程	公共研究	公共哲学	教授	田島正樹	価値本質論
博士後期課程	公共研究	共生文化	准教授	鴻野わか菜	複合文化論
博士後期課程	公共研究	公共教育	准教授	戸田善治	市民性教育論
博士後期課程	社会科学	法学	教授	石井徹哉	現代刑事法論

2008（H20）年度新規 大学院教育支援室担当者

2008年4月1日付で大学院教育支援室に特任教員２名、事務補佐員１名が着任しました。

1) 最終学歴
2) 研究テーマ
3) 主要業績（３点以内）
4) コメント

伊丹謙太郎（いたみ・けんたろう）特任教員
1) 2007年　東京工業大学大学院社会理工学研究科、満期退学　2) 政治学・政治理論
3) 伊丹謙太郎「環境」解釈の思想的次元『環境思想研究』Vol.2,2008
4) 新しい環境で，多くの刺激を受けたいと考えております。

崎山直樹（さきやま・なおき）特任教員
1) 2008年　千葉大学大学院社会文化科学研究科修了、博士(文学)　2) アイルランド近代史
3)　崎山直樹　「アイルランドにおける「社会団体」 －２つの芸術協会を中心に」『エール』、日本アイルランド協会研究部、21号、2001年。
　崎山直樹　「1840年代アイルランドにおける読書室とコンフェデレイト・クラブ」『千葉大学社会文化科学研究』、千葉大学社会文化科学研究科、６号、2002年。
　崎山直樹、 高口康太「「わたしたち」という救済」『現代思想』青土社、33(6)号、2005年。
4) 近代社会における諸問題を、大英帝国統治下のアイルランドを研究対象として考えてきました。教育支援室では大学院生のみなさんが本プログラムが掲げる「国際的な視野を備えた」研究者という目標に近づけるよう手助けしていきたい思っています。

山田徳美（やまだ・なるみ）事務補佐員

博士後期課程共同研究室（旧助手室）新規担当者

昨年度途中から「研究プロジェクト」ウェブ入力等をお願いしていましたが、2008年4月1日付で事務補佐員として配置され、常駐（開室時間中）していただくことになりました。

伊東久美子（いとう・くみこ）事務補佐員

2008（H20）年度 科学研究費新規プロジェクト

2008年度の新規採択は以下の通りです。

1）代表者名
2）2008年度予算額（単位は円。括弧内は間接経費を内数で示す。）

専任教員

基盤研究(C)一般
「文学と移動：ディアスポラ小説と手紙」
1）時實早苗教授
2）1,170,000（270,000)

若手研究(B)
「日中戦争期のアメリカ外交における中ソ関係の研究」
1）高光佳絵助教
2）1,170,000（270,000）

COEフェローおよびGP特任教員

若手研究(B)
「イテリメン語の音声・映像資料およびテキストコーパスに基づく記述言語学的研究」
1）小野智香子教育支援室特任教員
2）　2,080,000（480,000）

若手研究(B)
「日独戦争におけるドイツ総督府の戦時体制構造とその青島植民地社会への影響」
1）浅田進史COEフェロー
2）1,040,000（240,000）

若手研究(B)
「『公私』観念についての思想史的考察 - 18世紀スコットランド啓蒙哲学を中心として」
1）一ノ瀬佳也COEフェロー
2）1,820,000（420,000）

兼担教員

若手研究(B) 行動実験と計算モデリングによるカテゴリー学習における人間の認知情報処理の解明（松香敏彦文学部准教授）

若手研究(B) 西洋中世とイスラム世界の法概念の比較哲学的考察：トマス、アベェロエス、ガザーリー（山本芳久文学部准教授）

若手研究(B) 近代ロシア国家成立期における言語文化と視覚表象（鳥山祐介文学部准教授）

若手研究(B) オスマン帝国改革期における中央－地方の相互作用に関する研究（秋葉淳文学部准教授）

基盤研究(B)一般 対話における発話単位とその機能の認定に関する研究（傳康晴文学部教授）

基盤研究(B)一般 近世起源の在日異邦人（朝鮮人）に関する研究（趙景達文学部教授）

基盤研究(B)一般 新自由主義の歴史的展開に関する比較史的考察（小沢弘明文学部教授）

基盤研究(B)一般 メトロポリスからの外部性と創造性：千葉エリアからみる中心 - 周縁システムの変容（尾形隆彰文学部教授）

基盤研究(C)一般 新ピュタゴラス主義におけるマテーマタの展開（和泉ちえ文学部准教授）

基盤研究(C)一般 地方城下町におけるマチ会所の成立と都市行政の展開（菅原憲二文学部教授）

基盤研究(C)一般 ローマ帝政後期の国家と教会（保坂高殿文学部教授）

基盤研究(C)一般 自己論の観点からの社会学史の再構築（片桐雅隆文学部教授）

基盤研究(C)一般 （定型発達）成人における社会的認知能力の個人差に関する実験的研究（若林　明雄文学部教授）

若手研究(B) 時空間計量モデルの経済データへの応用（各務和彦法経学部講師）

基盤研究(C)一般 司法の政治学－基礎研究（新藤宗幸法経学部教授）

基盤研究(C)一般 「福祉地理学」と「持続可能な福祉コミュニティ」に関する研究（廣井良典法経学部教授）

基盤研究(C)一般 欧州における「ソーシャル・クォリティー・アプローチ」のアジアへの適用（小川哲生法経学部准教授）

基盤研究(C)一般 明示化困難な根拠に基づく自己決定権の制限（嶋津格大学院専門法務研究科教授）

基盤研究(B)一般 英語の批判的読解力と論理的発表力の育成―小中高大における系統的母語指導と連携して（椎名紀久子言語教育センター教授）

基盤研究(C)一般 唾液中ホルモン分析による生体リズムと朝の意欲・疲労感の関連性の検討（長根光男教育学部教授）

基盤研究(C)一般 南琉球西表方言文法の記述的研究（金田章宏国際教育センター教授）

2008年1～6月
人文社会科学研究科所属教員（兼担教員を含む）による出版物

倉阪秀史『環境政策論　第二版』信山社、2008年5月。

2004年に出版された『環境政策論』の第二版である。初版は、幸いなことに、多くの大学で環境政策論の教科書として採用されているところであるが、初版の出版以来、京都議定書の発効、第三次環境基本計画の策定をはじめとして、環境政策のすべての分野にわたって重要な進展がみられている。重要法律としても、「景観法」「国土形成計画法」「外来生物法」「環境配慮促進法」などが制定されている。第二版では、このような進展を可能な限り収録することを主眼として、改訂作業を行った。とくに、第４章第３節「２０００年代の環境政策」、第６章第３節「論点」（環境基本法に今後盛り込むべき事項等）、第１６章第２節「自然共生社会に向けた施策の展開」、第１７章第３節「戦略的環境アセスメント」を追加するとともに、第１９章「低炭素型社会形成関連法」を独立させたところである。環境政策の歴史、原則、手法を学ぶ教科書として活用されることを期待したい。

（本研究科教授　倉阪秀史）

広井良典編『「環境と福祉」の統合――持続可能な福祉社会の実現に向けて』有斐閣、341頁、2008年2月（¥2500税別）

本書は、「環境」と「福祉」という、ともすれば別個独立に論じられてきた二つの分野を総合的な視野から統合し、これからの日本や世界が実現すべき社会のあり方についての全体的なビジョンを構想することを目的とするものです。

「環境」と「福祉」という二つの領域は、これまで両者の間の一定の近縁性や親和性――たとえば、いずれも単なる市場原理のみでは解決が困難であり、市場経済を超えた何らかの側面を含むものであるといった点――が認識されるものの、自覚的な形で「環境と福祉」の両者を結びつけて論じたり、あるいは相互の「関係」に積極的に目を向けるという議論や試みは希薄でした。

しかしながら、既存の枠組みを取り払って考えてみた場合、「環境と福祉」という二つの領域は、実は相互に深く関連し合っているのではないでしょうか。たとえば、もしかりに世界が資源・エネルギー消費等の面で持続可能（サステイナブル）となり、「環境」の視点からは妥当といいうる社会が実現したとしても、そこにおいて大きな「分配」の偏りや不公正が存在していたとすれば、それは望ましい社会ということは困難です。逆に、もしも人々の「福祉」の充実ということが、これまでの福祉国家がそうであったように、“経済の限りない拡大・成長”ということを前提として初めて可能なものであるとすれば、それは現在の世界において普遍化できるモデルとはなりえません。だとすれば、「環境」の面において持続可能であり、かつまた「福祉」（この場合は、分配の公正や個人の幸福ないし生活保障といった意味）の面においても望ましいといいうる社会―「持続可能な福祉社会」―はどのようにして可能でしょうか。

以上の他、「ケアないし臨床レベル」「政策のあり方」等を含め、環境と福祉がクロス・オーヴァーする領域や事例は多く存在します。こうした問題意識を踏まえて、「環境と福祉」が相互に関わり合う多様な諸相や統合のあり方を、できる限り体系的かつ総合的な視座から探求していくのが本書の内容です。

なお本書は、「環境と福祉の統合」というテーマに関して先駆的な研究や実践活動を展開してきた研究者・実践家の共著によるものですが、その一つの軸になっているのが、21世紀ＣＯＥプログラム「持続可能な福祉社会に向けての公共研究」拠点の活動です。本書の一定部分は同プログラムでの各種研究会・セミナーや機関誌『公共研究』等の成果を基盤としています。そうした意味で本書は本ＣＯＥの成果の一つですが、同時に、本書を第一歩として、新たな社会構想やその原理、ケア、政策等に関する探求や実践をさらに発展させていければと考えています。皆様からの忌憚ないコメントや御意見をいただければ幸いです。

（本研究科教授　廣井良典）

保坂高殿『ローマ帝政中期の国家と教会――キリスト教迫害史研究 193-311年―― 』教文館、661pp.、2008年3月（¥12,000税別）。

本書は2003年に刊行した拙著『ローマ帝政初期のユダヤ・キリスト教迫害』（2008年度日本学士院賞受賞作品）の続編であり、2世紀末で考察を打ち切った前編を承ける形でセウェルス朝期（193-235年）から大迫害終結を宣言したガレリウス寛容令公布（311年）までの100年余りを考察対象に据える。その主眼は、千数百年来今日に至るまで堅く保持されてきたキリスト教中心史観（所謂“迫害”史観）の再検討にある。すなわち教会伝承によれば、古代帝国は神々への供犠の強制を通して信徒の背教と教会組織の破壊を目論んだものの、信仰篤き殉教者教会の徹底抗戦により戦いに敗北してキリスト教を公認せざるを得なくなった、つまり教会は勝利した、という。

しかしこうした教会を英雄視する歴史像は専ら教会側の史料に依拠して構築されているため、自らが描いた理想的な自画像と言わざるを得ない。本書は教父文献や殉教者文書に内在するキリスト教的なバイアスを可能な限り排除しながら帝国側の意図を正確に再規定することを目指す。史料分析から導き出された事実は教会伝承とは裏腹に、帝国は背教を求めることなく逆に教会を組織的に保護し、帝国秩序の枠内における共生を望んで強権的にこれを実行したこと、そして一般信徒の取り込み（供犠誘導）に成功したため、ガレリウス寛容令を発令して供犠強制策の終了を宣言したこと、すなわち帝国の勝利と教会の敗北であった。

本書はまた、古代地中海世界において神々と人間との関係のあり方に関する規範となっていた相互授受思想（do ut des）が共和政期以降どう具体的に変容していったか、そして帝国がいかにこの相互授受思想の変容と足並みを揃えて宗教集団に対する統制を強めていったかをも史料に基づき概観し、“キリスト教”諸皇帝が宗教集団諸派を正統（カトリック）と異端（ユダヤ人、サマリア人、キリスト教異端派）とに法的に分類した上で宗教弾圧を開始した帝政後期に至る発展をも展望する。

（本研究科教授　保坂高殿）

時実早苗著『手紙のアメリカ』南雲堂、2008年2月。

この書は、手紙こそが「書くこと」すなわち文学（そして生きること）を体現しているのだという基本的な立場から、手紙を中心にアメリカ小説を論じたものである。手紙とアメリカ小説の関係は深い。小説は書簡体小説にはじまり、その形式、物語、象徴において手紙と結びついているが、さらに、移動する人々によって成立したアメリカという国の文化にとって、手紙は重要な役割を果たしてきた。この関係をふまえ、アメリカ小説の主要な作品を手紙という観点からほぼ文学史的な順序で読むことによって、アメリカ文学を論じ、かつ手紙の本質について考察する。とりあげた作品は、『アメリカ人農夫からの手紙』「盗まれた手紙」『ハックルベリー・フィンの冒険』『ロット４９の叫び』など。

（本研究科教授　時實早苗）

高光佳絵『アメリカと戦間期の東アジア　―― アジア・太平洋国際秩序形成と「グローバリゼーション」』青弓社、2008年3月（¥3,400税別）。

本書は、2000年に一橋大学大学院法学研究科に提出した博士論文を基に大幅に修正・加筆して刊行したものである。1930年代のアジア・太平洋地域における国際秩序形成とアメリカの関係についての史的分析であり、1938年春までの中国をめぐるアメリカの国際秩序構想を詳細に検討することによって、アメリカの視角から国際秩序構想の対立を再検討したものである。第一次世界大戦を通じて可視化された国際政治の大きな構造的変動をグローバリゼーションの文脈で捉えた上で、そこにアメリカの対日認識、対中認識を位置づけることによって新しい戦間期国際政治史像を示している。

アジア・太平洋地域においては各政治主体のグローバリゼーションへの認識がそれぞれ部分的であったために、各自のグローバリゼーションへの認識に基づいた国際秩序形成の努力は相互にすれ違っていた。グローバリゼーションに適合する国際秩序を1930年代を通じて遂に確立することができなかった背景には、相互に、グローバリゼーションの一側面を脅威と認識し、主観的には戦争回避を望みつつ、相互のナイーヴな認識にいらだつ日米両国の姿があったことが明らかになったと言える。

また、本書は、アメリカが1930年代前半、東太平洋へ撤退することでグローバリゼーションにおける政治的・軍事的脅威である日本との接触を避けようしていたのは、日本の対中政策を了解したためではなく、中国の対日抗戦能力をきわめて低く評していたためであったという点を一次史料に基づき実証している。アメリカ国務省極東部には、1930年代前半まで、日本による政治的・軍事的脅威を過大視する一方で、インドや中国などのナショナリズムを軽視する傾向があった。しかし、1930年代後半には中国国民政府の内政基盤強化に伴い、中国治外法権放棄を決意するに至る。その前提となったのは華北分離工作期を通じてのアメリカの対中国認識の変容であった。日中全面戦争の勃発により、このアメリカの政策転換はすぐに挑戦を受けることになったが、中国が南京陥落を経ても日本と戦い続ける強い意思を示したことでアメリカの国際秩序構想は一つの転機を迎えることになったのである。

本書は平成19年度千葉大学学長裁量経費学術成果出版支援費の交付を受けて出版され、アメリカ学会清水博賞を受賞した。

（本研究科助教　高光佳絵）

修了生による出版物

人文社会科学研究科・社会文化科学研究科

渡部周子『＜少女＞像の誕生　–近代日本における「少女」規範の形成』新泉社、2007年12月。

【本書の概要】

「少女」とは何かという問いを通して、近代国家におけるジェンダー規範の形成を明らかにする。

今日自明のものと思われがちな少女という存在は、明治期に確立した学校制度が生み出した。すなわち就学期にあるために結婚まで猶予された「生殖待機」期間を、本書では「少女」期と捉える。

本書は二部構成から成り、第一部では教科書や教育論を対象として、近代国家が創造しようとした少女像を分析し、第二部では文学や美術を対象として、文化の領域で生み出された少女像を考察する。

【目次】

序　章　近代国家における女性の国民化
第一章　近代国家における「少女」期の位置づけ
第二章　「愛情」規範と「純潔」規範
第三章　「美的」規範

第四章　少女雑誌における規範の展開
第五章　実践教育としての「園芸」
第六章　浪漫主義文学と美術における「少女」像
第七章　白馬会における花と女性の表象
第八章　白百合に象徴される規範としての「少女」像
補　章　転落の狭間に置かれて
終　章　「少女」像とは何か
おわりに
解　　説　若桑みどり

【謝辞】

この度は、自著紹介の場所を頂戴しましたことに、御礼申し上げます。

在学中には研究を支援いただき、とりわけ重点経費公募事業に採択されたことは、大きな励みとなりました。

博士論文を審査くださった、池田忍先生、三宅晶子先生、安田浩先生、長田謙一先生（現首都大学東京教授）に御礼申し上げます。

なによりも、大学院を通じて指導くださった若桑みどり先生のご霊前に本書を捧げたく思います。

（2004年9月社会文化科学研究科博士後期課程修了、博士（文学）　渡部周子）

2008年1～6月
博士後期課程大学院生の研究業績
（人文社会科学研究科・社会文化科学研究科）

著書・論文

鈴木明子（共著）国立大学法人・千葉大学大学院看護学研究科・千葉大学21世紀COEプログラム・日本文化型看護学の創出・国際発信拠点（代表石垣和子）『日本文化型看護学への序章−実践知に基づく看護学の確立と展開』医学書院出版サービス、2008年2月。

木村智哉「記憶の風化と葬送に抗して―――中沢啓治『はだしのゲン』を読み直す」『イメージ＆ジェンダー Vol.8』彩樹社、2008年3月。

Kousuke Kaita. ‘Distribution of OE *mid rihte* as an Adverbial of Propriety - with Special Reference to the Textual Variation’. in Masachiyo Amano, Michiko Ogura, and Masayuki Ohkado (eds.), *Historical Englishes in Varieties of Texts and Contexts*. 2008. （forthcoming）

関義央「じん肺事例における損害賠償請求権の期間制限制度の動向―競合から統一へ―」植木哲編『民事法学の現状と課題（人文社会科学研究科研究プロジェクト成果報告書170集）』2008年2月。

呉哲「原始的不能についての一考察――2002年ドイツ債務法改正を契機として」『千葉大学人文社会科学研究』第16号、2008年3月。

呉哲「懸賞広告ついての考察」千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書〈第170集〉『民事法学の現状と課題』、2008年2月。

姜栄吉「米国における内部統制体制の構築と取締役の責任に関する考察」『人文社会科学研究』第16号、2008年3月。

姜栄吉 千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書第168集　遠藤美光編『内部統制システムの構築と取締役の責任』の第１章ー第4章担当、2008年3月。

犬塚康博「藤山一雄『新博物館態勢』を読む」橋本裕之編『パフォーマンスの民族誌的研究（2005ー2007年度）』（人文社会科学研究科研究プロジェクト成果報告書・第144集）、2008年2月。

高橋典嗣・山崎良雄（共著）『子どもの地球探検隊』千葉日報社、2006年6月。

高橋典嗣・富川奈津子・山崎良雄・吉川真・黒田大介・西山広太「宇宙時代のための天体軌道シミュレーション教材の開発」『科教研報（日本科学教育学会）』 Vol.22 No.4、2008年３月。

高橋典嗣「地球近傍小惑星の観測」『情報科学（札幌学院大学）』第28号、2008年３月。

山崎良雄・高橋典嗣・古澤亜紀「地球探検隊の試みーいわき」『千葉大学教育学部研究紀要』第56号、2008年３月。

山崎良雄・高橋典嗣・富川奈津子・古澤亜紀「地球科学教育における特定地域小学校と大学との連携的実践活動」『千葉大学教育実践研究』第15号、2008年３月。

入江俊夫「アームチェアの『自然主義』～ウィトゲンシュタインにおける、生活形式の一致と“spontan”～」千葉大学大学院人文社会科学研究科プロジェクト研究『哲学的自然主義の諸相』2008年2月。

入江俊夫「内的関係の生成とウィトゲンシュタインの数学の哲学」『人文社会科学研究』第16号、2008年3月。

入江俊夫「探求のアポリアとウィトゲンシュタイン」日本大学精神文化研究所『知識構造科学の創造へ向けての基礎研究』2008年3月。

王冰菁「会話文における対称詞の使用についての日中対照考察」『人文社会科学研究』第16号、2008年3月。

王冰菁「会話における対称詞の言語管理―日本語母語話者と中国語母語話者の母語場面と接触場面の比較」『言語生成と言語管理の学際的研究　接触場面の言語管理研究Vol.6（千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書）』2008年3月。

研究ノート

木村智哉「現代日本社会における「希望」と「絶望」についての覚え書き」千葉大学大学院・人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書・第156集『身体・文化・政治』2008年3月。

書評・映画評

木村智哉「津堅信之『アニメ作家としての手塚治虫その軌跡と本質』（ＮＴＴ出版、2007年）」千葉大学大学院・人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書・第175集『表象／帝国／ジェンダー ―――聖戦から冷戦へ』2008年3月。

木村智哉「『夕凪の街　桜の国』」『前夜　NEWS LETTER Vol.3』ＮＰＯ前夜、2008年。

関義央「松本克美著『時効と正義―消滅時効・除斥期間論の新たな胎動』（日本評論社、2002年）」『千葉大学人文社会科学研究』16号、2008年3月。

高橋典嗣「アルフレッド・ウェゲナー著、竹内均訳『大陸と海洋の起源』」『千葉大学人文社会科学研究』　第16号、2008年３月。

犬塚康博「伊藤寿朗『ひらけ、博物館』」『千葉大学人文社会科学研究』第16号、2008年3月。

研究発表

鈴木明子「手指衛生にみる医療従事者の意識と行動」『環境感染』vol.23　supplement、2008年1月16日。

その他

木村智哉「コラム　日本のアニメーション史研究が抱える一課題」『歴博　第147号』大学共同利用機関法人・人間文化研究機構・国立歴史民俗博物館、2008年3月。

竹内有里・金子淳・犬塚康博・浜田弘明「COE公開研究会「学芸員の専門性をめぐって」第2回　今後の博物館活動と博物館学の方向性」「人類文化研究のための非文字資料の体系化」第5斑編『高度専門職学芸員の養成―大学院における養成プログラムの提言―』（神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書）、神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議、2008年3月。

メディア・報道

＜地方紙＞
高橋典嗣「地球に衝突する小惑星の活動は」『北海道新聞』2008年３月13日。

＜テレビ＞
高橋典嗣「ジキルとハイド（第３回：巨大隕石衝突の恐怖）」『テレビ朝日』２月10日19時58分ー20時54分放送。

高橋典嗣「ジュセリーノの予言」『テレビ東京』２月12日　19時ー21時放送。

2008（H20）年度前半期全体研究会のお知らせ

2008年9月24日（水）と25日（木）の2日間にわたって開催されます。プログラム等詳細は後日、人社研ＨＰをご覧ください。

人社研ＨＰ　　http://www.shd.chiba-u.ac.jp/~ghss/

2008年度紀要『人文社会科学研究』刊行予定

『人文社会科学研究』第17号の刊行は9月下旬を予定しています。

『人文社会科学研究』第18号について

募集日程および留学生支援室による日本語チェックを希望する大学院生の**原稿締め切りが当初の予定より約２週間程度早まる見込みです**。編集委員会において詳細が決まりましたらＨＰ、統合メール通知版等でお知らせします。（９月上旬予定）

「投稿規定」「スタイルガイド」等は人社研ＨＰをご覧ください。
（変更が予定されておりますので、９月上旬以降ご覧いただければ幸いです。）
http://www.shd.chiba-u.ac.jp/~ghss/students.html

博士後期課程共同研究室の夏季開室時間変更について

2008年8月3日まで	平常通り
2008年8月4日～6日	短縮開室（午後2時15分～午後5時）
2008年8月7日～19日	**終日閉室**
2008年8月20日～27日	短縮開室（午後2時15分～午後5時）
2008年8月28日以降	平常通り

発行者　千葉大学大学院人文社会科学研究科
発行日　2008年7月16日
Phone/fax 043-290-3574
gshss412@shd.chiba-u.ac.jp